

P-205 内視鏡的に直接所見のみられた

悪性黒色腫肺転移の2例

神戸大学医学部放射線科¹，同・第2外科²，
同・皮膚科³，兵庫県立成人病センター放射線科⁴，○田中浩司¹，足立秀治¹，楠本昌彦¹，酒井英郎¹，石井昇²，
三島 豊³，高田佳木⁴，大林加代子⁴

内視鏡的に直接所見のみられた悪性黒色腫肺転移の2例につき報告する。

症例1：55才，男性。5年前に大腿部の悪性黒色腫摘出術施行。肺転移巣（右S⁸）から気管支内腔（右B⁸）にポリポイドに発育し，黒色を呈していた。

症例2：48才，男性。6年前に右母指の悪性黒色腫摘出術施行。肺門部リンパ節転移巣から気管支内腔へ浸潤がみられ，内視鏡的に右上中幹分岐部に白色の結節浸潤型腫瘍として認められた。

考察並びにまとめ：内視鏡的に直接所見のみられた悪性黒色腫肺転移の報告は，調べ得た範囲では18例のみであるが，15例（83%）がポリープ状腫瘍としてみられ，結節浸潤腫瘍が2例，Diffuse melanosisが1例みられた。悪性黒色腫の転移がamelanoticとなる例は他に1例の報告をみるのみで非常に稀であるが，原発性肺癌および他の腫瘍との鑑別が困難なため，慎重な病歴の聴取およびDOPA染色などの特殊染色が必要と思われた。

P-207 転移性肺腫瘍の画像診断の再検討

— 45手術症例の解析

埼玉県立がんセンター放射線部¹，同呼吸器科²，同胸部外科³○酒井 洋¹，鈴木文直¹，砂倉瑞良¹，小笠原秀人²，
吉井 章²，米田修一²，野口行雄²，吉田清一²，
山本光伸³

【目的】肺野に孤立性の腫瘤状陰影がある場合，原発性肺癌と転移性肺腫瘍との鑑別が画像所見では困難な事がある。我々は，従来の診断基準を見直し，手術症例について原発臓器別の画像上の特徴を検討した。

【対象】1976～89年までに当院で手術された転移性肺腫瘍144例中，画像並びに摘出標本で気管支，脈管の追跡が可能であった45例（子宮頸癌14例，体癌3例，腎癌7例，大腸癌14例，乳癌7例）。

【方法】胸部画像所見について再検討し，摘出標本との病理形態学的対比を行い，各原発腫瘍毎の特徴を比較検討した。

【結果】転移の形態を，原発性肺癌類似型と良性腫瘍型に分類した。原発性肺癌類似型は大腸癌で57%と有意に高かったが，他は20%台であった。

【結語】大腸癌の単発性肺転移は，画像上原発性肺癌（特に腺癌）類似型が予想以上に多く，肺癌の鑑別診断として常に念頭に置く必要があると思われる。

P-206 髄膜腫の肺転移の一例藤田学園保健衛生大学病院内科¹，同外科²，同病理³
○古川博史¹，内藤龍雄¹，中島規博¹，佐賀 務¹，
末次 勸¹，服部良信²，笠原正男³，溝口良順³

髄膜腫が頭蓋外へ転移することは極めて稀であり，その頻度は0.1%とされている。その転移部位としては肺が最も多く，また脳原発巣発見から転移巣発見までの期間は長く，平均6.6年と報告されている。

今回，我々は髄膜腫の摘出術後約8年の後に肺転移が発見された一症例を経験したので報告する。

症例は32歳，男性。1981年8月，脳腫瘍（肉腫様髄膜腫）摘出術が行われ，次いで放射線治療（60 Gy）が追加された。1983年12月，局所再発のため再度脳腫瘍の摘出術が行われた。1986年2月，胸椎への転移が認められ，局所へ放射線治療（50 Gy）が行われた。

1989年2月より血痰，咯血が出現したため，同年4月当内科受診。胸部X線写真上，右S⁴に腫瘤影が認められたため，精査目的にて入院となった。気管支鏡検査では中葉入口部に新鮮血の流出が認められたが，洗浄細胞診はClass Iであった。同年6月中葉切除術が行われ，切除標本より病理組織学的に悪性髄膜腫と診断された。術後経過良好にて現在外来通院中である。若干の文献的考察を加えて報告する。**P-208** 子宮・卵巣を原発とする転移性肺腫瘍の治療に関する検討

浜松医科大学第1外科

○小林 亮，富井明望，野木村宏，杉村久雄，堀口倫博，
鈴木一也，原田幸雄

目的：子宮・卵巣を原発とする転移性肺腫瘍に対し，肺切除を施行した症例の予後，切除した肺腫瘍の病理組織所見を検討し，こうした転移性肺腫瘍の治療につき考察した。

対象：1979年9月より1988年1月までに当科において肺切除術を施行した子宮・卵巣を原発とする転移性肺腫瘍11例を対象とした。原発疾患は絨毛癌7例・子宮癌3例・卵巣癌1例である。子宮癌・卵巣癌においては根治的手術が施行されており絨毛癌では化学療法のみが6例，化学療法＋手術が1例であった。肺転移巣の発見は原発巣と同時のものから原発巣治療後4年で見つかったものまでである。肺切除術は1葉切除6例（絨毛癌4，子宮癌2）部分切除4例（絨毛癌3*，子宮癌1）肺全摘1例（卵巣癌）2葉切除1例（絨毛癌1*）（*は重複）であった。

結果：転移巣は単発7例（絨毛癌5，子宮癌2）多発4例（絨毛癌2*，子宮癌1，卵巣癌1 *；1例は異時性）であり絨毛癌の転移巣の中には病理組織学的に癌組織を認めず，壊死組織のみから成る結節性病巣もあった。今回対象とした症例のうち絨毛癌は1990年6月まで全例生存しており，子宮癌の3例は2年以内死亡が2例，2年以上生存が1例，卵巣癌は術後2カ月で死亡している。死因は癌死2例，他病死1例である。